特集

多文化状況を前景化する
～長崎からの発信～

多文化社会研究編集委員　増田　　研

特集の趣旨

本特集の基礎となっているのは、2014年10月から11月にかけて開催された同名の連続講演会である。渡邊欣雄氏（國學院大學）、児玉昌己氏（久留米大学）、西原和久氏（成城大学）は、それぞれ日本の文化人類学、政治学、そして社会学分野の第一線で活躍する先生方であり、多文化社会学部にとっては、学部創設にあたって多大なる御協力を仰いだ方々でもある。

多文化社会学部は、長崎大学初の人文社会系の専門学士課程としてスタートを切ったが、同時に、地球上の人間社会を「多文化状況」にあると捉え、その現状認識から出発し、世界を理解するための枠組みとしての「多文化社会・学」を提案している。

ヒト、モノ、情報、カネが行き交うグローバル世界が多文化状況にあることは当然であるが、研究者も、また教育者も、手続き上やむを得ないことであるとはいえ、従来は一国家、一民族、一文化圏を対象として研究を進めてきた。つまり、世界が多文化状況にあることは自覚しつつも、それを十分に前景化してきたとは言えない。複数文化の共存・並存状況を前景化し、その限界と可能性を問い、議論の対象としての輪郭を与えるために、『多文化社会研究』創刊号において、その指針を示すことがこの特集のねらいである。

多文化社会学は「まだ、ない」。それはおそらく、異質なディシプリンの組み合わせ、あるいは融合として今後数年かけて現れてくるものであろうが、

基礎となるディシプリンは多様であり、対象へのアプローチも画一的ではない。また、ここで語られることが、多文化状況を前景化する可能性のすべてではない。こうした講演から得られた示唆を自らの学問的営為と接続させる努力を持続させること、それが多文化社会学部構成員（教員のみならず学生も含まれる）に託された喫緊の課題だと言えるだろう。